

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	あるく・よん		
○保護者評価実施期間	2026年 1月 5日		2026年 1月 31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	16名	(回答者数) 12名
○従業者評価実施期間	2026年 1月 5日		2026年 1月 16日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6名	(回答者数) 6名
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 13日		

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	小・中学校・高等学校の学年や年齢に応じて分けられた事業所であること	小学生、中学生、高校生では、発達課題や趣味嗜好が異なることから、社会生活に向けて学年や年齢に応じた支援を提供している。	学年や年齢に応じて分けられた事業所であるが、分けが異なる他事業所との交流をすることで、その他児童を見て、児童自らが発達過程の振り返り、自己理解を深め、更なる発達課題に取り組む意欲を育めるような支援を展開している。
2	児童の障がい特性に応じた分けがされた事業所であること	ダウン症、知的障害、自閉症スペクトラムとの大まかな障がい特性の分けだけではなく、自閉症スペクトラムでも、感覚過敏、コミュニケーション障害など、より細分化した事業所編成としており、児童が心地よく通所できるような工夫や環境設定を行っている。	障がい特性に応じて分けられた事業所であるが、分けが異なる他事業所との交流をすることで、その他児童を見て、児童自らが発達過程の振り返り、自己理解を深め、更なる発達課題に取り組む意欲を育めるような支援を展開している。
3	施設的ではなく家庭的な雰囲気療育を行っていること	戸建ての一軒家を利用することで敷居を低くするとともに、支援員は児童に対して「くん・さん」付けして呼称することを徹底し、児童から支援員に対しては、〇〇先生ではなく、「〇〇さん」と呼称してもらうことで、同じ目線で物事を捉えていくことを意識している。	挨拶は、社会生活において自分自身の存在を相手に伝える重要な手段であるとの認識のもと、児童と支援員との間に留まることがなく、支援員間、近隣住民などの社内外で、気持ちのこもった挨拶をかわすように取り組んでいる。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	勉強や運動に特化した事業所ではないこと	リトミック講師などを月に数回招きレクリエーションを行うことはあるが、勉強や運動に特化できるほどの教員・講師経験者やスキルをもった支援員や専属講師は在籍していない。	在籍する教員免許をもつ支援員に、特定分野についての勉強を特化させることも考えられるが、自立支援や日常生活の充実のための活動を提供することが事業所の役割であると認識しているため、勉強や運動の特化は考えていない。
2	終日において個別対応ができないこと	個別対応するスペースや支援員は確保できているが、終日においてマンツーマンで対応できる支援員の余力やスキルは現在のところ持ち合わせていない。	児童が高揚してしまった場合など、状況に応じた短時間の個別対応は行っているが、集団・社会での日常生活の充実や自立支援が事業所の役割と認識しているため、終日の個別対応は考えていない。なお、支援員のスキル向上のための研修などは、月に1回以上定期的に行っている。
3	事業所の建物が古いこと	戸建てが4軒連なる立地で弊社他事業所との連携など、事業所としての利便性は良好であるが、築40年超の建物であり現状を維持するには改修を伴うことが想定される。	事業所の立地や利便性から、直ちに移転、改修、新築することは考えられないが、将来の検討課題である。